

平成 30 年度

第 6 7 回九州地方放送教育研究大会 鹿児島大会発表原稿

「テレビ会議システムを利用した地区協力校との連携」

～「開陽はひとつ」をめざして～

鹿児島県立開陽高等学校

教諭 山下 照哉



期 日 2019年2月14日（木）～15日（金）

会 場 鹿児島県民交流センター

「テレビ会議システムを利用した地区協力校との連携」 ～「開陽はひとつ」をめざして～

I はじめに

開陽高校通信制課程に勤務して6年目になります。これまで前任校において、地区協力校の面接指導者として12年間（うち11年間は世話係）かかわってきました。日々仕事をしながら頑張っている生徒の姿（20年前はすべて私より年上）を間近で感じ、その姿を勤務校の生徒たちに話をすることもありました。一緒にレポートを考えながら、いろいろなことを逆に教えてもらい、自分自身が学ぶことができたと思います。しかし、実際に本校で勤務してみると、今までと違う学校のシステムや環境のなかで、最初は「あれ？生徒がいない！！」と戸惑いを感じ、担任をした生徒の半分近くは顔と名前が一致しないという状況でした。家庭訪問と、スクーリングやLHRで機会を見つけて声かけをした結果、今年度は顔と名前の一致しない生徒は1割程度となっています。部活動の練習や生徒会活動を通して、一部の生徒とはありますが、関わりを持つことができていますが、今後はさらにコミュニケーションを深めるとりくみをしたいと考えています。

通信制に入学してくる生徒は、自ら通信制を選んだのか、それとも選ばざるをえなかったのか、その背景は様々です。悩みを抱えている生徒も多く、学習が思うように進まなかったり、活動そのものを休止したり、中には退学や除籍になったりする生徒もいます。生徒によりそいながら、一人でも多くの生徒とかかわり、社会的・職業的自立に向けた環境作りをしていきたいと考えています。

II 本校の概要

本校は県内唯一の単位制公立高校で、全日・定時・通信制の3課程が併設されています。創立19年を迎え、県内に14の協力校を有し、「夢・実現」（校訓）をめざして、約1,490人の生徒が学んでいます。1948年度からの県立高校通信制の歴史は、県内外で活躍されている卒業生、そして在校生へと受け継がれています。

1 卒業の要件

- ① 在籍3年以上（前籍校を含む）
- ② 74単位以上修得（必履修含む）

（併修等での単位取得、技能審査や高卒認定試験に合格することで、単位認定が可能）

- ③ 30時間以上の特別活動（前籍校も含む）

2 単位修得認定

① レポート

教科科目で定められた数のレポートを決められた期日までに提出して合格する。

（場合によっては再提出あり）

一枚でも不合格になると履修が認められない。

② スクーリング（面接授業）前期・後期それぞれ

本校：日曜日（8回）月曜日（5回）水曜日（6回、申請した生徒のみ）

協力校：日曜日（7回、島嶼は8回）協力校の生徒は本校でも受講可

1コマ90分で2時間分のスクーリングとなり、各科目で決められた時間以上の面接授業を受講する。（協力校は本土7校、島嶼7校、それぞれの地区の面接指導者が指導する。）

③ テスト

前期・後期それぞれA・B日程で受験する。さらに1回の追試のチャンスがある。

※①～③のすべてを満たすと単位修得になる。



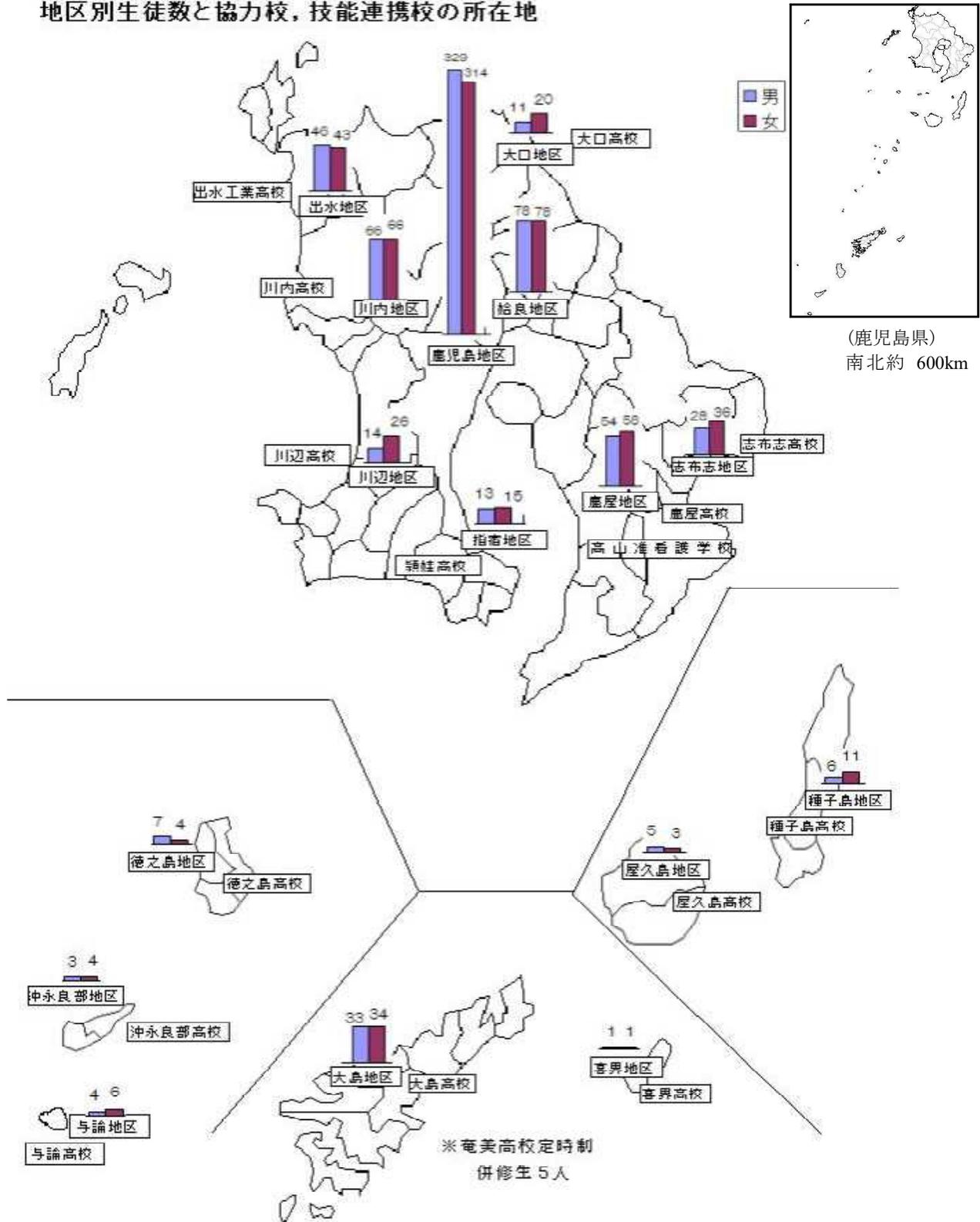
3 特別活動

スクーリング時に行われるホームルームや学校行事に参加することによって認められる。

4 協力校

本校に通学することが困難な生徒のために、本土地区7校，島嶼地区7校の協力校がある。

地区別生徒数と協力校，技能連携校の所在地



- ・ NHK 学園高校の生徒や，併修生（奄美高校定時制），科目履修生として多くの生徒が学んでいる。（2018年5月1日現在）

Ⅲ 本校生徒の現状

1 過去の入学者数と卒業生数・在籍者数の推移

年度	2013	2014	2015	2016	2017	2018
新入生	238 (203)	211 (186)	198 (165)	184 (164)	172 (153)	193 (177)
転入生	316 (221)	271 (187)	251 (172)	255 (171)	231 (152)	312 (207)
編入生	106 (80)	105 (67)	85 (54)	73 (46)	84 (56)	77 (44)
計	660 (504)	587 (440)	534 (391)	515 (381)	487 (361)	582 (428)
卒業生	448 (134)	415 (120)	374 (117)	366 (106)	330 (72)	(74)
在籍者数	1,878	1,743	1,575	1,452	1,375	1,417

※在籍者数は5月1日現在、()は前期

2017年度の在籍者数1,375人のうち200人の生徒が活動を休止し、159人の生徒が昨年度末に除籍になっています。この割合は毎年あまり変化がないようです。

(除籍：学則により2年間にわたり受講登録をしない場合)

2 転入学生について

	2016年度(255人中)		2017年度(231人中)		2018年度(312人中)	
不登校	132人	51.8%	122人	52.8%	160人	51.3%
長期療養	9人	3.5%	5人	2.2%	10人	3.2%
経済的状況の悪化	5人	2.0%	4人	1.7%	4人	1.3%
その他	109人	42.7%	100人	43.3%	138人	44.2%

県内の高校から転入学してきた生徒の転学理由

転学の理由として、「不登校」が最も多くなっています。その背景は様々であり、中学校時代から「不登校」が続いていたり、入学後の人間関係だったり、考えていた高校生活とのギャップであったりという理由などから、「不登校」となる場合や、学習意欲が低下することにより「不登校」になる場合が多いようです。

「経済的状況の悪化」では、「ひとり親家庭」や家庭環境等の変化で生活が苦しくなり、働きながら高校を卒業したいと考え、転学を希望したケースが多いようです。

「その他」では、一家転住や、やりたいこと(夢)のために、働きながら学ぶことを選択したケースもありますが、最も多いケースとしては、出席日数不足、成績不振による原級留置、「問題行動」などからやむなく転学したケースがあるようです。

このようにして、多くの生徒が高校は卒業したいと最後の救いを求めて開陽高校通信制に転学してきています。

〈参考〉 鹿児島県高校中途退学者の中退理由

	2015年度	2016年度	2017年度
「問題行動」	11%	5%	7%
「不登校」	33%	38%	33%
経済的理由	2%	3%	3%
「学力」不振	6%	4%	4%
身体的理由	5%	5%	10%
人間関係	11%	12%	9%
原級留置	0%	3%	3%
その他	32%	30%	31%

(鹿児島県同教「進路を切り拓く」より)

3 入学3年後の学籍状況

	転入生	編入生	新入生	計
2016年3月までに卒業	146 (53.9%)	63 (60.0%)	59 (28.0%)	268 (45.7%)
2017年度在学中	48 (17.7%)	11 (10.5%)	69 (32.7%)	128 (21.8%)
転学	1	1	2	4
転籍	3	0	1	4
退学	14	3	15	32 (5.5%)
除籍	59 (21.8%)	27 (25.7%)	65 (30.8%)	151 (25.7%)
計	271	105	211	587

(2014年度入学生587人の入学後の状況)

2014年度に入学してきた生徒587人のうち、2016年度3月(3年以内)までに卒業したのは268人で全体の45.7%、一方で約3割(31.2%)にあたる生徒が退学や除籍になっています。この値は2011年度入学生とほぼ変化がないようです。

また、転入生や編入生と、新入生の場合は3年間で卒業率や除籍や退学になる率が極端に違います。その要因には、転入生や編入生は学びたいという意欲を持つ生徒の割合が多く、新入生には、中学生時代からいわゆる「不登校」で、通信制以外の学校を選ぶことすらできずに、進学してきた生徒が多いと考えられます。

4 生徒への支援・相談活動のとりくみ

本校生徒は学校へ登校する回数が少ないが、少しでも学習活動がしやすくなるよう、次のとりくみを行い、生徒の把握や支援に努めている。

(1) 生徒への配慮事項・支援等の希望調査

①内容：新・転・編入生徒の保護者を対象に希望調査(案内文の送付)を行い、スクーリング等で必要な配慮事項について職員間で情報を共有する。

②実施：4月、9月

③対応：担任、教育相談・特別支援教育係

(2) スクールカウンセラーによる教育相談

①内容：5月、10月に全生徒へ案内文を送付

②実施：5～2月(年間18回×カウンセラー2人：3課程共通)

③対応：希望者は担任へ申し込む。→ 係で日程の調整を行う。

(3) 「聞き合う会」の開催

①内容：学習活動や学校生活に困難を抱えている生徒の保護者が、お互いに悩みや情報を交流することで、励まし支え合えるような場を設定する。

②実施：年7回計画

③対応：教育相談・特別支援教育係 ※該当担任の希望があれば、会に参加してもらう。

(4) 開陽通信制教育相談

①内容：学習活動に困難や不安等を感じている生徒・保護者等に対し、本校職員と直接面談ができる場を設定する。活動生だけでなく不活動生にも案内を送付する。

②実施：5月下旬～6月上旬、10月下旬～11月中旬、2月中旬～3月上旬(年3回)
地区(島嶼以外) → 各1日

本校 → 2週間程度相談期間を設定

③対応：教育相談・特別支援教育係

※該当担任の希望があれば、係と交代もしくは同席してもらう

(5) 児童福祉施設等への訪問・連携支援

- ①内容：本校生徒が所属している児童福祉施設や障害者施設等を中心に外部施設へ訪問し、生徒への必要な支援等に関する意見交換や助言を受けるなど、連携した支援を行う。
- ②実施：7～8月を中心とするが、相手先の都合で柔軟に対応する。
- ③対応：教育相談・特別支援教育係 ※該当担任等の希望があれば同行する

(6) ベーシックスタディ教室の開設

- ①内容：学力に自信がない、学習のやり方がわからない等、学習することに困難を感じている生徒が、少しでも「学ぶ」ことの喜びを感じながら基礎学力を身につけてもらえるような学び直しの中場としたい。

今まで不登校であったため、スクーリングへ出席することに不安を感じている生徒が学校に来て学習するきっかけとしたい。

○国語 ○算数・数学

小学校～中学校で学習する内容を準備し、生徒に応じた教材を使って学習する。

- ②実施：前期、後期の水曜日それぞれ8回を計画
- ③対応：教務係、教育相談・特別支援教育係

(7) 地区別学校説明会（個別相談）の実施

- ①内容：開陽高校通信制課程への入学を希望している生徒及び関心のある生徒とその保護者向けに、通信制の学習のすすめかた・学校生活等の説明、生徒・保護者からの質問・相談等
- ②実施：11月～12月、2月～3月の開陽通信制教育相談の日程にあわせて、各地区で行う。
- ③対応：教務係、教育相談・特別支援教育係

IV 具体的なとりくみ

通信制に入学してくる生徒は、たくさんの悩みを抱えてくる場合が多く、その理由は様々です。自ら通信制を選んで入学してくる場合もありますが、選ばざるを得なかったという生徒がほとんどです。多くの生徒はそういう状況の中で悩みながらも、卒業していきますが、学習が思うように進まず、除籍になる生徒が約11%、学習活動を休止している生徒も約15%います。

このように学習が思うように進まない要因は、次のように考えられます。

- ①約650人（約44%）の生徒が協力校で学んでおり、電話や年10回発行している開陽通信が主な連絡手段となっている。担任と直接会って話す場が少なく、通信制に特徴的な学習の進め方や、行事への申し込みなど、言葉だけではイメージが湧きにくく、生徒にうまく伝わらないことがある。協力校は少人数である場合も多く、本校や他の協力校の様子を知る機会がほとんどない。
- ②学力の差が大きく、基礎的な部分でつまずきを感じている場合も多く、レポート作成がままならない生徒も少なくない。また、分からないことをなかなか電話等で質問できないという生徒もいる。

これらのことから課題として、本校と協力校の距離をどのように縮めるか、学習支援をどのように進めるかが上げられます。通信制の高校は自学自習が基本となっていますが、その自学自習もままならないことに困り感のある生徒も多くいます。一人でもたくさんの生徒が、在学中にいろいろな体験をしたり、学習して分かったことに対する喜びを感じてもらう場を作ることが必要である。そうすることで自分自身を認め信じることで、自信を持つことにつながるからです。こういうことから、「一人ひとりを大切に学習支援」のあり方を工夫することが重要であると考え、その一助として放送教育を位置づけ、研究にとりくみました。その中で、テレビ会議システムを利用

した試みについて報告します。

テレビ会議システムを利用したスクーリングの試み

(1) 目的

県教育センターの F@ce ネット（テレビ会議システム）を利用して、LHRや授業配信、生徒の交流などを行い、本校と協力校、協力校どうしの連携を深めることで、学習意欲の向上、ひいては自己肯定感の向上につなげる。

(2) 具体的なとりくみ

- ① 県教育センター来所研修 2017年1月18日(水)14:30～（4名の職員で参加）

F@ce ネット(つらネット)の利用方法等の研修

- ② 県外先進校視察 2017年2月15日～16日（3名の職員で訪問）

長崎県立鳴滝高等学校・熊本県立湧心館高等学校

- ③ 穎娃高校(協力校)と本校でテレビ会議システム利用試験

2017年3月24日(金)10:15～13:00

本校から3名の職員が穎娃高校に出張し、空き教室(パソコン室)を借りて行う。

〈結果〉画像の動きもなめらかで、会話は問題なくできるが、生徒用の回線を利用したときに回線速度が遅く感じる。Excel や PowerPoint の利用も問題ない。動画を流すことはできない。

- ④ 川辺高校(協力校)と本校とで動作確認 2017年5月10日(水)10:00～

川辺高校の担当者にお申し、本校と接続確認を行う。

〈結果〉穎娃高校と同様な結果であった。接続は問題なく行うことができるが、接続するときの機器の操作等を本校以外の職員にお申しすることは、難しいということを実感した。

- ⑤ 地区スクーリング(開講式)でのテレビ会議システム運用試験 2017年5月14日(日)

オリエンテーション時に、本校・川辺高校・穎娃高校・川内高校・与論高校(すべて協力校)をつないで試験を行った。

〈内容〉進行：本校(職員)

(ア) 各校からの簡単なあいさつ

- ・ 協力校紹介、生徒会役員紹介、与論地区同窓会長あいさつ

(イ) 校長あいさつ(本校より)

(ウ) 諸連絡

- ・ 行事参加補助について(与論地区から)
- ・ 芸術鑑賞会について(穎娃地区から)
- ・ ふれレクについて(川内地区から)
- ・ 部活動紹介(本校：生徒会役員より)

〈結果〉・機器の接続はうまくいったが、テレビ会議を開始するタイミングをどのようにあわせるか。

・ウェブカメラがディスプレイ上部に固定するタイプだったので、人数が多いと全体をうまく写すことができなかった。

・会場が広いために、音調をあげたときに音が割れるという症状が出た。

・画面表示の工夫

今回5分割の画面表示であったが、自動で画面が切り替わったり、表示自体が小さいため、プロジェクターを利用しても大人数では今のシステムでは見づらく感じた。

〈感想〉・離れた場所にいるのに、一緒にいるみたいで不思議だった。



(与論高校での様子)

- ・先生や生徒会の人説明はよく理解できた。
- ・遠く離れた場所の人とも簡単に話せることはとても便利だし、良いと思った。
- ・地区の方々と会える機会がないので、少しでも交流できることがとてもすてきなことだと思った。
- ・他の地区とつないで、様子が見れたという点では良かったが、映像の画質が悪かったり、音声が悪く聞き取りづらい部分もあったり、課題もあった。
- ・映像が見えづらかったのと、声あまり聞き取りづらかった。
- ・見えづらく、画面が切りかわってよく分からなくなった。
- ・席が後方だったので、見えづらくて声もあまり聞こえなかった。

⑥ 地区スクーリング時の LHR での利用試験

6月25日(日)13:15～12:30

本校・颯娃高校・志布志高校・川内高校（すべて協力校）をつないで行った。

〈内容〉進行：本校（職員）

ア 18歳の選挙権（颯娃高校より）

イ 行事紹介（本校生徒会役員より）プレゼンテーションを利用

ウ 各地区紹介（颯娃高校、志布志高校より）

〈結果〉・時間を設定し、接続テストもできたので良かった。

- ・川内地区では音声途切れてしまった。
- ・手でカメラを動かして、全体を写すようにしたが、画面がぶれるので要検討
- ・画面が4分割であったため、見づらさは軽減されたのではないかと感じた。

〈感想〉・初めての体験だった。こういうものを使った授業や会議もおもしろそうだと感じた。

- ・まだ参加したことのない学校行事のことや、18歳の選挙権、他地区のことが知れて良かった。
- ・映像はそこまで気にならなかったけど、音質が悪い気がした。
- ・途中途中で聞きづらく、内容が良く理解できなかった。



(川内高校での様子)

⑦ テレビ会議システムを利用した授業配信試験

・9月27日(水)校内で研修を行う。

実施例 物理室 ⇔ 201教室

カメラの写し方等の確認、マイクの確認など。

・授業配信試験

日程	10月22日(日)	10月29日(日)
協力校	颯娃高校	川内高校
1・2 校時	実施科目 コミュ英Ⅰ② 授業者 山本	国語総合② 森重
3・4 校時	実施科目 化学基礎, 生物基礎, 地学基礎 授業者 山下, 江平, 吉竹	数学Ⅰ② 東
出張者	東・森重	伊東・山下博

〈結果〉

(ア) 実施上の準備について

- ・実施日を決めて、時間割の調整。出張者の調整。授業者の調整。
- ・教育センターへの申請（申請後2～3日で許可が出る）
- ・実施時間までに機材の搬入（地区によってはパソコン他持ち込み）セッティング
会場が開くのが8：30の場合、授業開始の9：00に間に合わせるために、セッティングして、接続確認をするには時間的に厳しい。
（すぐつながらない場合がある。担当者の慣れも影響する。）
- ・川内高校では数学を予定していたが、天候の関係もあるのか出席者がゼロで実施できず。
- ・理科は、地学基礎は選択者がいなくて実施できず。最初に生物基礎を45分配信し、その後化学基礎を45分配信した。

(イ) 実施しての感想から

「レポートの注意点やポイントがよく分かった」「いつもと違う授業で新鮮だった。」という感想がある一方で、「映像が見づらかった。」「質問がしづらかった。」「音声聞き取りにくかった。」という問題点も分かった。

また、「本校の授業を直接受けてみたいくなった」、「本校に行ってみたいと思うようになった」という、感想がある。

機会があればまた授業配信を受けてみたいかという問いに、「とても思う」とか「思う」という感想であった。

(ウ) 協力校担当者の感想

〈颯娃〉

理科・とても説明はわかりやすいが、他科目の受講生がいると質問しにくいし、声を出して答えるのも気が引ける。今の形だと場合によっては学習効率も下がると思われます。



(颯娃高校の様子を本校で)

英語・映像が途切れるのは（&乱れる）ストレスです。仕方ないとは思いますが、一方通行なので「分かっている」ということが前提になります。分からないもしくは、苦手な子にとってはポカーンだと思います。

- ・本学で認識できるスクリーニング会場の広さが狭すぎるため、横に座れるのは3人が限界のようです。それ以上の生徒がいたときには困るかもしれません。
- ・事前に生徒の理解度を知らないで、理解度の低い子にとっては異次元の話に聞こえていると思います。

- ・参加している生徒がどこまで理解できているかを確認しながら文法の説明をしたいと思うものです。もしした方がよいなら、スクーリング担当が文法を説明することはできるかもしれません。

(川内)

国語・時々声が聞き取りづらくなる。

生徒が、画面に向かっては話しかけにくそうだった。

(エ) 実施上の課題

- 画質が悪い。映像や音が途切れる。
 - ・プロジェクターとスクリーンを利用するため、スクリーンとレポートや教科書を見るための照明の明るさをどうするか。
 - ・音が途切れるのは原因不明。考えられるのは、ソフトとパソコンの相性（パソコンのスペックやソフトの不具合？＝処理速度）や、回線速度が遅いこと。回線速度が遅いのは、動画を再生できないことから分かるので、専用回線が必要になる？
 - ・カメラの画素数の高いカメラやズーム機能等のあるカメラを利用することも必要になるが、処理速度や回線速度が対応できるかが心配。配信時、操作する必要も生じる。
 - ・黒板を利用した授業だと、文字の大きさや黒板の範囲、チョークの色づかいも考えて書かないといけない。また、何度も消して書く必要が出てくる。
 - ・鳴滝高校のように、プレゼンテーションソフトを利用する必要があると思われる。
 - ・マイクが、黒板に書く音や雑音を拾ってしまい余計に聞き取りづらくなっている。また、黒板を指しながら話したり、マイクとの距離が変化することも一因。黒板利用の授業ならば、無線のマイクセットが必要となる。
 - ・黒板利用でなく、プレゼンテーションソフト利用の授業だけであれば、専門の配信室が必要(鳴滝高校)。
- 時間割の調整、同じ教科でも他科目の受講生が同室にいる。
 - ・川内高校のようにいくつかの教室を利用していても、解決は難しい。小規模校になると1室で行っている場合もあるので、余計に厳しい。
- 事前の予告の方法
 - ・前週のスクーリングを利用して告知を行ったが、当日科目違いの生徒とのやりとりで時間がかかった。また、生徒の学習の進度によって、内容を変える必要があった。この日のこの時間、ここでどの範囲をという予告をどうやって行うか。

2018年度のとりくみ

⑧ 地区スクーリング（開講式）でのテレビ会議システム運用試験

日 程	2018年5月13日（日）	2018年10月14日（日）
協力校	川内, 川辺, 与論高校	川辺, 大島, 与論高校
担当者	東, 池水, 迫屋, 山下	池水, 迫屋, 濱園, 森重, 山下
本校	泊, 大山, 校長, 生徒会役員	泊, 大山, 校長, 生徒会役員
実施内容	校長あいさつ 同窓会長あいさつ（川内） 生徒会長あいさつ 芸術鑑賞会の案内（川辺） 生徒会から（与論） 学校行事紹介（スライド利用）	校長あいさつ 生徒会長あいさつ 学校行事紹介 終了後 与論と数学の授業配信

- ・持参するもの（準備するもの）

川内（パソコン、web カメラ、スピーカ、マイク、）

川辺・大島・与論（web カメラ、スピーカ、マイク、）

本校：理科室のパソコンを物理室に移動、プロジェクター、スクリーン、web カメラ、スピーカ、マイク



（本校の様子）

〈結果〉

（ア） 実施上の課題

- ・同窓会長との連絡ミスにより、同窓会長挨拶が実施できず。
- ・10/14 の与論地区は、9 月 29 日に瞬間最大風速 56.6m/s を記録した、台風 24 号の影響で、2 週間経過してもネット回線が復旧しておらず、実施できなかった。



（川辺高校の様子）

（イ） 実施した感想（生徒）

- ・緊張しました。
- ・自分たちの学校だけでなく、本校や他の協力校と情報交換をしたり、コミュニケーションを取れるのはすごくいいことだと思いました。
- ・大島の様子が本校や他校に行っていたり、他校の様子が見れたりする事で、一人で頑張ってるんじゃない、と思えるんじゃないかな？！
- ・ふれあいレクレーションや文化祭がどんな風なのか少し分かってよかったです。
- ・普段関わりのない他の地区の生徒たちの様子がみれてよかったです。
- ・本校の先生や校長先生、生徒会の人たちの顔が見られて良かったです。
- ・とても真新しく、非常に貴重な体験が出来たと思います。
- ・顔を見ながら会話が出来るので、とても良いと思います。
- ・手を振るなどのアクションが少しはずかしかったです。
- ・一度のテレビ会議で複数の映像をつなげることができるのが、すごかった。
- ・本校の先生方や生徒さんのことを知ることができてよかったです。そして、開陽高校のことについて深く知ることができてとてもこれからの参考になりました。
- ・普段直接会うことが出来ない人の顔を見て話すことができるのもいいと思った。
- ・本校の校長先生の声がきけたり生徒会の人達の頑張りを知れて私も、ますます頑張りたいなどはげみになりました。頑張ります！！
- ・他の地区の様子がみれてとてもいいと思うが、また体験したいとは思わないです。時間のロスを感じた。
- ・反響したりして途中から聞きづらかったです。
- ・他の学校のことは、あまり知る機会がないのでとても楽しく思いました。もう少し音声聞こえやすくなると良いなと思いました。また、体験したいと思います。
- ・音声のハウリングや画像のブレがあったが、三校が会わずに会話できるのはすば

らしいと思った。

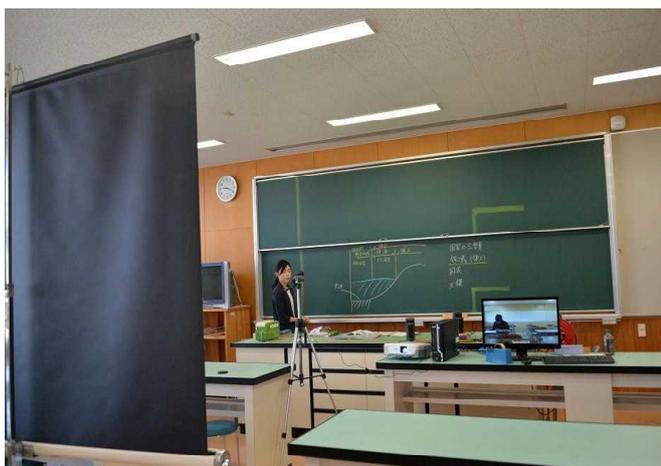
(職員)

- ・大島高校の先生が協力的で助かった。担当者が違ったらこんなにスムーズにいかなかったかも。恥ずかしいと言いながら手を振ってくれたり、生徒も非常に協力的だった。
- ・9時半から、という設定だったので、時間をもたせるようにしたが、でもそれが川辺を待たせることになってしまった。
- ・音は非常にクリアだったと思う。映像の設定を失敗した。しゃべっている人が大きくなる設定にしたつもりだったのに。

⑨ テレビ会議システムを利用した授業配信試験

日程	7月1日(日)	11月11日(日)
協力校	出水工業高校	出水工業高校
1・2校時	実施科目 コミュ英Ⅰ①	地理B②
	授業者 山本	山下博
3・4校時	実施科目 数学Ⅰ①	国語総合②
	授業者 大山	森重
出張者	山下・山下博	山下

〈結果〉 7/1のコミュ英Ⅰ①は4人受講(うち1人はコミュ英Ⅱであった。) 数学Ⅰ①は1人受講
11/11の地理B②は、1人受講、国語総合は2人受講



(本校から地理B配信の様子)



(出水工業高校の様子)

(ア) 課題と反省

- ・出水工業高校の先生方の協力が非常にありがたかった。機材の準備から、生徒への指示などをしてもらい、2回目の出張は1人で対応することができた。協力校の先生方の協力がないと難しいことを痛感した。
- ・生徒のリアクションが分かりづらかった。(英語)座席の関係?、先生のサポートが助かった。数学は意思の疎通ができていた。呼びかけに頷いてくれたり、指示に従ってくれたり、もちろん協力校指導者のサポートのおかげである。
- ・想定していた進度が異なっていたため、用意したプリントを利用できなかった。

○音声、画像が乱れた。

- ・プリントが合ったりぼけたり、声が聞こえなかったり、大きくなったり
- ・事前に調整したはずなのに、板書が見切れた。→カメラを動かして対応
- ・途中で回線が切れた。ジャックが外れた?

- ・板書するとき、自画像で隠れる部分があることを計算に入れていなかった。
- ・音声のラグが時間がたつほどひどくなっていく気がした。

(イ) 生徒の感想

- ・レポートが終わっている人だったり、自分なりのペースでやる人もいるので、そういう人たちには必要ないなと思いました。
- ・とてもわかりやすかったです。
- ・すぐ質問できるのが良いと感じました。
- ・こっちの映像が暗くて、こっちの動きが伝わっていたか不安になった。
- ・感動

(3) 課題

① 協力校のパソコン等を借りて行うことについて

- ・教育情報システムが導入されており、県に登録したパソコンしか利用できない。
- ・借用したパソコンに F@ce ネットのソフトをインストールするのにも抵抗感があった。
- ・パソコンを貸すことができない協力校もあり、現状では実施不可能な場合がある。
- ・本格実施に向けて、機器を購入し、協力校に管理をお願いする形が考えられ、協力校の職員の負担が増すことが予想される。

② テレビ会議システムを利用する際の準備等について

- ・協力校との時間調整。F@ce ネット利用申請書を提出し、利用許可を受ける。
- ・協力校のパソコンを借用する。ログインに使う IC カードを本校職員が持参する。場合によってはスクリーンやプロジェクターを持参する。
- ・機材を準備する協力校はもちろん、出張して実際に接続を行う本校職員の負担を軽減する必要がある。
- ・接続開始時間をそろえるには、事前に準備を行う必要があるため、時間と利用できる空き教室と人員が必要になる。

③ 興味を持ってくれる生徒もいるが、必要ないと答える生徒も多いということについて

- ・本校や他校の様子が見れたり、校長や生徒会の映像が見れることに興味を持っている。
- ・説明を受けることで、学習理解につながっている。
- ・レポートを終わらせることが第 1 と考えている生徒もおおり、自分の分からないところを質問した方が良いと考えている場合には、必要性が感じられないと思われる。
- ・映像が見づらかったり、音声がうまく聞こえなかったりすることが大きく影響していると思われる。

④ 映像が見づらかったり、音が途切れることについて

- ・映像については、自動で映像が分割され切りかわるので、専用ソフトの利用が必要である。また、音が途切れるのは回線速度の問題が大きいと思われるので、専用回線の導入が必要となると考えられる。

⑤ 受講する生徒の把握について

- ・協力校の時間割に沿って計画する必要があるが、どの生徒がどの時間に受講するか分からない状況での把握は難しい。
- ・生徒への周知や、進度に合わせた利用を行うためにも、年度初めにすべての計画をたて、協力校との時間割の調整や、授業者、出張者の割当など、課題が多い。
- ・14 の協力校すべてに同じように、テレビ会議システムを利用するには現状では厳しい状況である。

4 まとめ、今後の課題

通信制というシステムの中で、ちょっとした時間を見つけて話をしたり、弁論大会の原稿作成や教育相談をしたりなど、ごく一部の生徒としかじっくり話す機会を見つけられずにいます。

Aさんは、家庭環境の変化から生活が昼夜逆転してしまい、学校に行けなくなり、転入してきました。「絶対同級生と一緒にの時期に卒業するんだ」と語ったAさん。途中、出産を経験しながら、言葉通り卒業していきました。そのAさんが4月に学校に立ち寄り、近況報告をしてくれました。私が「Aさんはほんとにすごい、よく頑張ったと思うよ。だっていろいろあったのに自分が言ったとおり、卒業したよね。本当に嬉しかったよ。」というと、Aさんは「覚えていてくれたんだ、私本当に頑張ったよ。」と、大粒の涙を流しながら語ってくれました。

生徒は過去にいろいろなことを経験していたり、また今でもいろいろなことを抱えたりしたままということもあります。しかしながら、一步を踏み出そう、次のステップに進もうと考えている生徒や、踏み出せずにいる生徒、踏み出したくても状況がそれを許してくれない生徒など様々です。通信制は「いつでも・どこでも・だれでも」学ぶことができます。さまざまな思いをもって入学し、県内各地で学んでいる生徒たちが、生き活きとした学校生活を送り、本当に開陽通信で学んで良かったと思える学校でありたいと考えています。

テレビ会議システムを実際に利用してみて、今後も継続的に利用するためには、クリアすべき課題がたくさんあることが見えてきました。テレビ会議を利用する目的は、本校と協力校をつなぐことで担任と生徒の距離を縮めたり、生徒どうしがつながることで学校行事に参加しやすくなるといったところにあります。このことが結果的に、生徒一人ひとりの様々な体験につながり、自学自習のための環境作りにもなると思うからです。

この研究を進めるうえで、どのようにしたら生徒の思いによりそうことができるか、生徒と職員をつなぐツールとなり得るのかということを中心に考えていました。クリアしないといけない課題もたくさんありますが、改めて放送教育の役割や可能性に気づくことができました。また、今回のとりくみを通して、職員同士の横のつながりの大切さを実感しました。具体的なとりくみに対して、いろいろなアドバイスや協力をもらえたことに感謝したいと思います。

予算や人的配置に限りがある中で、本校のとりくみはまだ始まったばかりです。今後本格的に運用するためには、出来ることを少しずつ改善を図りながら継続してとりくんでいくしかありません。少なくとも前期・後期にそれぞれ1回以上開講式やスクーリング等で活用し、1歩でも前進できるように研究を続けていく必要があります。何年かすると職員はほとんど入れ替わりますが、職員は変わっても、生徒は常にかかわりを必要としています。多くの生徒たちと、数少ないタイミングを逃さずに、今後もさらにかかわっていきたいと思います。今回の研究が今後さらに継続していくためにも、生徒・職員がなるべく負担を感じずにとりくめるような内容・環境づくりが必要です。今後も多方面からの研究・実践を続けていこうと思います。